

聖書

聖書は、創造者なる神の「知恵、知識、真理の宝庫」

「直ぐな心で（ヨシエル）」、聖書に向かう者は多くの宝を見つけ、何よりも神に出会う

詩篇 119：7、エペソ人 6：5「**真心**から」、マタイ 13：44-46

しかし、深く知ること「知識」をどれほど積んでも、信じ委ねる「信仰」には至らない

- ②ダイナミックな多角的、立体構造：神の視点、人類史に先立って配備された摂理
- ③古代ヘブル（イスラエル）史を通して記された正確な人間史：
過去（史実）を学び、現在を見分け、未来を見通す洞察力習得のテキスト
- ④聖書自体が成就を証しする ^{まこと}真の神の預言：神の約束の確かさ、成就の確かさ
- ⑧ひな型、予型：預言的に前もって示される、未来のある出来事

使徒パウロの宣教

その4

ガラテヤ書

4章

- ：1「ところが、**相続人**というものは、**全財産の持ち主**なのに、**子どものうちは、奴隷と...**」：
 - *相続人であっても、成長過程で劣等な子どもの時期がある
「子ども」：
 - *幼い子ども
- ：2「**父の定めた日までは、後見人や管理者の下にあります**」：
 - *父の子どもは、最後には不動産を所有するが、
子どもの時期は奴隷のように、監督者の管理下に置かれた
「後見人」：
 - *3：24-25の「**養育係**」とは異なる
 - *相続人の人格を見守り、その財産を守るために信任された
 - *信任期間は、その子どもが成熟した「子」としての年齢に達するまで 5、6、7節
 - *子どもの成熟の年齢はその父親が決め、そのとき、あと取りとしての承認の儀式が行われた
- ：3「**私たちもそれと同じで、まだ小さかった時には、この世の幼稚な教えの下に奴隷と...**」：
 - *パウロ、子どもから世継ぎへの描写を、
信徒の以前の地位と今の地位との対照を示すために、適用
「この世の幼稚な教え」：
 - *信仰において経験的に未熟な状態への言及
「奴隷となって」：
 - *この世の掟や支配の下に置かれている状態
- ：4「**しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれ...**」：
 - *「とき」は父が定める
 - *天上の父も、御子キリストの来臨の「とき」を定められた
「ご自分の御子を遣わし」：
 - *神は天上ですでに存在しておられた方、キリストを地上に遣わされた
「女から生まれた者」：
 - *子は、神であり、人であった
 - *子が母親だけに言及されていることは、処女降誕の教理に一致
「律法の下にある」：
 - *キリストはユダヤ人として、モーセの律法の下にお生まれになった
 - *キリストは律法を完全に守られ、律法を成就された
- ：5「**これは律法の下にある者を贖い出すため...私たちが子としての身分を受ける...ため...**」：
 - *キリストの贖いの対象は、掟を知り、善悪の判断ができる年齢に達した「罪人」
- ①モーセの全律法体系への隷属下からの贖い
 - ★強調は、律法による束縛
- ②キリストの受肉と死は、信じる者に、子としての完全な権利を保障

聖書

- : 6「…神は、『アバ、父』と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました」:
- *父なる神は御子、御霊を送ってくださった
 - 救いには、三位格の神がみな関わっておられる
 - *聖霊は、神との親子関係にあるすべての信徒に授けられた神の賜物
 - 「アバ、父」:
 - *「アバ」は「父」に対するアラム語、幼子が、父親を呼ぶときに用いる幼児言葉
- : 7「…あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子ならば、神による相続人…」(下線付加):
- *パウロ、「ガラテヤ人はもはや奴隷ではなく、息子であり娘である」と宣言
 - *6節の複数形、7節では単数形
 - *神の家族では、子であるとは「相続人である」ということ
 - *しかし、ヨハネ20:17のお言葉に留意!
 - +キリストご自身と、キリストを通して相続人にされる私たち信徒との違いを認識する必要
 - +キリストご自身の 一父との親子関係— は独自
 - *「子」とされても、私たちはまだ単なる被造物にすぎない
- : 8「しかし、神を知らなかった当時、あなたがたは本来は神でない神々の奴隷でした」:
- *ガラテヤ人、回心前、異教の祭司制度、ゼウスなど偽りの神々への隷属下に置かれていた
- : 9「…今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに…」(下線付加):
- *学んで知る、経験的に知るようになること
 - *しかし、大きな変化が起こった
 - *彼らは神を知るようになり、神に知られるようになった
 - *真の神を知るようになったのに、ガラテヤ人はキリスト信仰の自由と光を捨てた
 - 「無力、無価値の幼稚な教え」:
 - *パウロ、ガラテヤ人の逆戻りに驚き、落胆
 - *ガラテヤ人はこの世のものに引き戻された
 - *この世の信仰体系は本物か、偽物かの二つだけ
 - +偽りの宗教は、何か「手に握っているもの」
 - +本物の信仰体系は天から顕され、「私自身には何もない」との証しに信徒を導く
 - テトス3:5
- : 10「あなたがたは、各種の日と月と季節と年とを守っています」:
- *割礼派のユダヤ人の影響下で、ガラテヤ人、モーセの宗教暦を守り始めていた
 - *特別な日々、一週ごとの安息日や季節ごとの祭りを— 守った
 - *パウロは自分自身ユダヤ人として宗教暦を守っていた
 - *しかし、パウロは、異邦人が救いの手段としてこれらを守ることに反対した
- : 11「あなたがたのために私の労したことは、むだだったのではないか…案じています」:
- *もしガラテヤ人が律法遵守の慣習を続けるなら「私の働きは徒労に終わる」と、パウロ
 - *強調は、パウロの律法主義の宗教への嫌悪、強い不快感
- : 13「肉体の弱さにもかかわらず、私が最初どのようにしてあなたがたに福音を説いたかは、あなたがたがご存じのとおりです」→この訳のほうが自然!
- *パウロ、彼らの心に触れようと、自らのミニストリーの初期に言及
- : 14「そして私の肉体には、あなたがたにとって**試練となるものがあつたのに**…」:
- *パウロの弱さは、眼に関わることであったと、広く想定されている
 - *しかし、ガラテヤ人たちはパウロの対しどのような拒絶も表わさなかった
 - *パウロ、多くの癒しを行つたが、自分自身の刺はいやされなかった
 - *このことは、「信仰による完全な癒し」の主張に対する反証
- : 15「…あなたがたは…できれば自分の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思った…」:
- パウロの肉体の刺に関する二通りの見解**
- ①おそらく、眼の病
 - ☆ガラテヤ人は自分たちの目を犠牲にしてもよいと思った
 - ②大胆な比喩的表現
 - ☆ガラテヤ人たちがかつて抱いた最高の評価を伝えるための修辞法とみなす

聖書

- : 16 「…私は、あなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしょうか」 :
- *しかし今、すべては変わった
 - *真理を語ることで、互いが疎遠になることは往々にして起こる
- : 17 「あなたがたに対するあの人々の熱心は正しいものではありません…」 :
- *ガラテヤ人たちに対するパウロの情熱は純真であった
 - *律法主義者たちの動機は不純であった
 - *パウロは真理を語ったが、割礼派のユダヤ人たちの勧誘はへつらいであった
- : 18 「良いことで熱心に慕われるのは、いつであっても良いものです…」 :
- *だれにとっても慕われることは良いことであるが、問題はその意図の是非にある
 - *割礼派のユダヤ人の意図、動機は不純であった
- : 19 「私の子どもたちよ」 :
- *優しく呼びかけて、パウロ、自分を、子を産もうとしている母親になぞらえた
 - 「私は再びあなたがたのために」 (下線付加) :
 - *パウロはこの苦しみを前に、彼らの救いのためにも経験した
 - 「あなたがたのうちにキリストが形造られるまで」 :
 - *パウロ、信徒たちがキリストの御姿に変えられることを願った
 - *神は、各々の信徒がこのように生きることを願っておられる 2: 20
- : 21 「律法の下にいたいと思う人たち…あなたがたは律法の言うことを聞かないのですか」 :
- *パウロ、ガラテヤ人が律法の教えを理解しているのかどうかに挑んだ
- : 22 「…アブラハムにふたりの子があって、ひとりには女奴隷から、ひとりには自由の女…」 :
- *再びパウロは、ユダヤ人国家の創設者アブラハムを引き合いに出した
 - *このアブラハムのたとえは、律法主義的な教師たちの影響を受けて、
「律法の下にいたいと望む」ガラテヤ人に向けられた
 - *未信者(まだキリストを受け入れていない罪人)に適用されるものではない

旧約の律法

1. 奴隷女ハガルに象徴される
2. 肉によって生まれた子、イシュマエルに象徴される
3. 霊的、政治的な束縛下にあったパウロの時代のエルサレムを代表する

恩寵の新約

1. 自由の女サラに象徴される
2. 神の約束によって奇蹟的/超自然的に生まれたイサクに象徴される
3. 自由で栄光ある天のエルサレムを代表する

- : 23 「女奴隷の子は肉によって生まれ、自由の女の子は約束によって生まれたのです」 :

- *二つ目に対照的なのは、生まれた方法
- *イシュマエルは通常の方法、肉によって(自然に)、奇蹟や神の約束とは無縁に生まれた
- *他方で、イサクは、約束の預言の結果、信仰の結果、生まれた子であった

イサクはキリストのひな型

- ☆事前に、超自然的に出生が告知された
- ☆出生前に命名された
- ☆神のご計画、預言を担う子として誕生 創世記21: 12
- ☆身代わりのいけにえとしてささげられた
- ☆三日後、父に戻された 創世記22章

アブラハムに生まれた二人の子どもの話

- ☆次にパウロ、二人の母親を比喩的に用いた
- ☆律法と恩寵が正反対であることを強調するため、アブラハムに生まれた二人の子どもの話を「ひな型」、あるいは、「寓意」として用いた
- ☆パウロ、二人の息子の概念に、さらに別の意味があることを洞察し、
これら二人の息子の話を、ユダヤ教とキリスト信仰との間の紛争になぞらえた

聖書

：24「このことには**比喩**があります。この女たちは二つの契約です。一つはシナイ山…」：

★まず、パウロ、二つの契約に言及

1. シナイ山に源を発するモーセとの契約
2. アブラハムとの契約

：25「このハガルは、アラビヤにあるシナイ山のことで、今のエルサレムに当たります…」：

★次にパウロ、二つのエルサレムに言及

①ハガルは一世紀の都エルサレム

★当時のエルサレムは、律法主義の宗教の中心

†ユダヤ人がエルサレムから追い出された理由 ルカ19：44

†メシヤを眼前にユダヤ人宗教家たちの反応 ヨハネ19：15

†民衆の叫び マタイ27：25

：26「しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です」（下線付加）：

②サラは、すべての恩寵の子らの母、天にある新しいエルサレム（後に地上に降りて来る都）

★パウロ、天のエルサレムが地上にあるエルサレムに匹敵するというラビたちの考えを

擁護するのではなく、自身の要点を描写するために、天と地上のエルサレムの概念を利用

：27「…子を産まない不妊の女よ。声をあげて呼ばわれ。産みの苦しみを知らない女よ…」：

★イザヤ書54：1からの引用

★イザヤの言葉は、イスラエルの変えられる未来を預言

†パウロはこれを、サラの生涯に適用

★また、パウロ、イザヤ書54：1を教会に適用

イスラエルの未来

☆預言者ホセア、神がイスラエルを「私の民ではない」と拒絶される時期を通ることを預言
ホセア書1、2章

☆キリストは、メシヤを拒んだイスラエルの引き続く盲目状態を告げられた

パウロは、それが「教会が完成する」まで続くと、告げた

☆しかし、究極的に、イスラエルの最終的な実りは、メシヤが地を治める時代にもたらされる：

：28「兄弟たちよ。あなたがたは**イサクのように約束の子どもです**」：

★28－30節で真理を引き出し、読者に要点を明示するためにパウロ、三つの比較を用いた

①イサクの誕生をキリスト者の誕生になぞらえた

★キリスト信徒は、イサクのように約束の子

：29「…**肉によって生まれた者が、御霊によって生まれた者を迫害したように、今も…**」：

②イサクに対するイシュマエルの迫害をキリスト信徒に対する偽りの教師たちの敵意にたとえた

★この初期の敵意、二つの民の間に永続、

今日に至るまでイスラム教徒とイスラエルとの緊張関係に根づいている

★パウロは、割礼派のユダヤ人を、律法主義的な自己の努力から生まれた者たちとして、

イシュマエルになぞらえた

★彼らは聖霊の力によって生まれた真の信徒を迫害する

：30「しかし、**聖書は何と言っていますか。『奴隷の女とその子どもを追い出せ…』**：

③アブラハムの行為をガラテヤ人の義務になぞらえた

★サラは、アブラハムに奴隷女とその息子を追い出して、

イシュマエルがイサクとの共同相続人になることがないようにと願った

★律法と恩寵、「働きに基づく宗教」と「信仰に基づく信仰体系」には根本的な不一致がある

：31「…**兄弟たちよ。私たちは奴隷の女の子どもではなく、自由の女の子どもです**」：

★すべての信徒は自由の女の子どもで、「**神の相続人であり、キリストとの共同相続人**」

ローマ人8：17

パウロが用いた寓意/たとえ

☆パウロはガラテヤ書のこのくだりで、読者たち、一律法の重荷の下へと誘惑されていた

ガラテヤ人— の益のために、自分の要点を描写する必要に迫られ、寓意を用いた

☆実際の歴史的事実を否定しているのではない

☆パウロは、実話に二次的な意味をつけた